



Title	〈翻訳〉パチャクティ・ヤムキ『ペルー王国の昔の出来事に関する報告書』
Author(s)	染田, 秀藤
Citation	Estudios Hispánicos. 1999, 23, p. 179-193
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93881
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

史料翻訳（１）

Juan de Santa Cruz Pachacuti Yamqui *Relación de Antigüedades de este Reino del Perú* (パチャクティ・ヤムキ『ペルー王国の昔の出来事に関する報告書』)

染 田 秀 藤*

はじめに

久しく欧米のラテンアメリカ史研究者にその史料的価値を否定されてきた文書の中に土着史料と呼ばれるものがある^①。アンデス史にかぎって言えば、それは、無文字社会に生まれた先住民がアルファベットを習得し、それを用いて自分たちの過去を書きつづったり、過酷な植民地体制下で生きのびるために伝統的な特権の承認を求めて記したりした文書であり、中には、カステイーリャ（スペイン）語で書かれた作品もある^②。ここに翻訳紹介する史料もその一つであるが、現在の研究段階では、著者の生涯はおろか、作品執筆の動機や目的も定かではない。また、執筆時期に関しても、17世紀前半であることが判明しているにすぎない^③。17世紀前半はアンデスにおいて組織的な偶像崇拜撤廃運動が繰り広げられていたので^④、作品はパチャクティ・ヤムキがその運動の責任者であるフランシスコ・デ・アビラに提出した報告書である可能性は否定できないものの^⑤、それを確証する史料は現在のところ発見されていない。

いずれにしても、『ペルー王国の昔の出来事に関する報告書』は征服に関する敗者の視点を読み解くために、また異文化（キリスト教文化）と先住民文化の同化・融合の実態を探るためにも、きわめて貴重な作品であると同時に、アンデスの宗教やインカ支配期の歴史を解明するための重要な一次史料でもある。したがって、全訳を試みるが、紙数の関係上、3回に分けて訳文を掲載することを予めお断りしておきたい。

* *Estudios Hispánicos* Vol.20に掲載した拙稿「ラス・カサスとペルー～『インディアス文明誌』にみるアンデスの文化～（１）」のつづきは下記の表題で第4回国際民族史学会研究

報告集に収録されているので参考にさせていただきたい：“La cultura andina y Las Casas” en *Etnohistoria* Tomo II. Lima, 1998. pp.436-458.

(注)

- ①クロニカに関しては、拙著『インカ帝国の虚像と実像』（講談社 選書メチエ 1998）20-24頁ならびに拙稿「書評論文 Franklin Pease G.Y., *Las Crónicas y los Andes*」*Ex Oriente*（大阪外国語大学言語社会学会誌）No.1, 1999. 281-298頁を参照されたい。
- ②アンデスに関して言えば、ワマン・ボマの『新しい記録とよき統治』*Nueva Crónica y Buen Gobierno*が代表的である（参考：友枝啓泰・染田秀藤共著『アンデスの記録者ワマン・ボマ—インディオが描いた《真実》—』平凡社 1992年）。
- ③従来、マドリードの国立図書館に保管されていたクロニカの原本を1879年に公刊したマルコス・ヒメネス・デ・ラ・エスパダの唱えた1613年説が通説として受けとめられてきたが、1990年代に新しい校訂版を出版したピエール・デュビオルは1620-40年説、同じくカルロス・アラニバルは1620年代後半説を唱えている。
- ④Duviols, Pierre, *La Destrucción de las Religiones Andinas (durante la Conquista y la Colonia)* UNAM. México, 1977. pp.176-193.
- ⑤このクロニカがフランシスコ・デ・アビラ関係の文書の中に収められているのを発見したのはイギリスのクレメンツ・マーカムで、彼は1873年に*An Account of the Antiquities of Peru*という表題のもと、英訳版を刊行した（ロンドン）。

底本にはペルーの歴史家カルロス・アラニバルによる校訂版（Juan de Santa Cruz Pachacuti, *Relación de Antigüedades de este Reino del Perú*. Edición, índice analítico y glosario de Carlos Aranibar. México & Lima, 1995）を用いたが、以下の既刊本を随時参考にした。

* *Tres relaciones de antigüedades peruanas*. Edición de Marcos Jiménez de la Espada. Asunción, 1950. pp.205-281.

* *Historia de los Incas y Relación de su Gobierno* en Colección de Libros y Documentos referentes a la Historia del Perú. 2a. serie. T.IX. Anotaciones y concordancias con las crónicas de Indias por Horacio H. Urteaga. Lima, 1927. pp.125-235.

* *Crónicas peruanas de interés indígena*. Francisco Esteve Barba ed., Biblioteca de Autores Españoles. T.CCIX, Madrid, 1968. pp.279-319.

* *Antigüedades del Perú*. Henrique Urbano y Ana Sánchez, Historia 16. Madrid, 1992. pp.171-269.

* Edición, estudio etnohistórico y lingüístico de Pierre Duviols y César Itier. Cuzco, 1993.

なお、訳文中、（ ）は底本に従い、訳者による挿入はキッコー〔 〕、簡

単な注は〔 〕で示し、改行はすべてアラニバル版にしたがった。また、ケチュア語の邦訳には1993年版のセサル・イティエルのスペイン語訳を参考にした。



イエス、マリア

私こと、ドン・フワン・デ・サンタクルス・パチャクティ・ヤムケ・サルカ・マイワは我らが主である神の恩寵によりキリスト教徒としてコリヤスーヨ〔地図1参照〕のカナスとカンチスの間に位置するオルコスーヨのアナン・ワイワとウリン・ワイワ・カンチスのサンティアゴ村で生まれました。私はドン・ディエゴ・フェリペ・コンドル・カンキとドーニャ・マリア・ワイロ・タリの嫡子であり、ドン・バルターサル・カキア・キウイとドン・フランシスコ・ヤムケ・ワナクの嫡出の孫にあたり、彼らの伴侶、つまり私にとって祖母にあたる人たちはいまなお健在です。

同じく、私はドン・ガスパル・アポ・キウイと部将ドン・フアン・アポ・インカ・マイワの曾孫であり、ドン・ベルナベ・アポ・イラス・ウルクニポコ、ドン・ゴンサロ・ピサロ・ティンターヤおよびドン・カルロス・ワンコの玄孫にあたります。この人たちはみな、先記の地方を治めた有力なカシーケ〔首長〕であり、我らが聖なるカトリック信仰の事柄に帰依したキリスト教徒でした。断言しますが、彼らは、〔スペイン人が到来したとき〕まっさきにカハマルカのタンボ〔宿駅〕へ駆けつけ、キリスト教に改宗したカシーケであり、異教を奉じていたころ信じていた事柄、すなわち、人類古来の仇敵である悪魔や悪霊（共通語でハピニュニョ、アチョカリヤと呼ばれる）が捏造した嘘偽り、儀式や祭式をことごとく、まず最初に否定したのです。

それと言うのも、当時、司祭の方々、つまり、我らが主イエス・キリストの福音の掟を携えてこの高貴きわまりない土地タワントインスーヨ〔「4つの地方からなる世界」の意で、スペイン人クロニスタは「ペルー王国」とか「インカ帝国」と記した〕に足を踏み入れられた使徒である最初の宣教師の方々が立派な漁師のごとく、優しくて慈悲深い言葉を投げ網のように使って、我らが主である神のために魂を獲得するという聖なる熱意に燃えておられたからです。そうして、彼らは私の先祖の人たちに〔キリストの〕教えを説き、我らが聖なるカトリック信仰の秘儀について教え込みました。その後、さき

に述べた私の先祖の人たちは我らが聖なるカトリック信仰の事柄を知り、かつ、じゅうぶんに理解したあと、洗礼を授かったのです。そのとき、彼らは〔サタンを〕否定し、次のように言い放ちました。「サタンとその取り巻き、その偽りの約束やあらゆる儀式を捨てます」と。

それゆえ、彼らはキリスト教徒、つまり、我らが主イエス・キリストにその子として受け入れられて以来、聖なるカトリックの信仰を守り、正真正銘のキリスト教徒になりました。そして、それまで信じていた偶像崇拜や儀式にことごとく敵対したのです。例えば、彼らは妖術師たちを追いつめ、その手からワカ、つまり、偶像を一つ残らず奪って破壊し、その地方一帯に住む配下の家来や民の中に偶像崇拜者がいると、彼らを摘発し、罰を加えました。我らが主である神のおかげで、私の先祖の人たちはそのような信仰生活を送り、その結果、神は、男女を問わず、彼らの孫や子孫にあたる私たちにも聖なる祝福を授けられました。

結局のところ、私は神の恩寵のもと、神の慈悲により、当然のこととして聖なるカトリックの信仰を奉じています。とどのつまり、父方、母方に関係なく、私の先祖の方々は神の慈悲により洗礼を授かり、異教を奉じていたころに陥っていた地獄の軛という呪縛から解き放たれたのです。すなわち、かつて彼らはかなり危険を冒して、また、危険な状態を知りながら、迷信に耽り、悪魔に仕えていたのです。我らが主よ、どうか彼らの魂に哀れみと慈悲を垂れ、かつて犯した冒涇をすべてお許しください。そして、彼らの魂をそのお姿に似せておつくりになったみもとへお導きください。

〔さて〕私は、先記の人たちの嫡出の孫、末裔として、成人して以来変わることなく、我らが聖なるカトリック信仰の秘儀を墨守するのに努めてきましたし、隣人に対しては、神の法である十戒を遵守する気持ちと熱意をもってさらに精進し、立派なキリスト教徒になるよう説き勧め、我らが聖母ローマ教会にならって我らが主イエス・キリストの存在を信じてきました。つまり、私ことドン・フアン・デ・サンタクルスは聖母ローマ教会と同様、我らが主イエス・キリストの存在を信じているのです。したがって、私の願いは未来永劫いつまでも生きかつ治められる三位一体なる神を畏怖しながら、教会の中に生きかつ死んでいくことであります。

はっきりと申し上げますが、私は三位一体なる神の存在を信じております。神は全能であり、天と地とそこに存在するあらゆるもの、例えば、太陽、月、星、金星、光、稲妻、雷など万物を創造されました。その後、神

は最初の男アダムとその妻イヴを自分に似せて創られました。すなわち、アダムとイヴは人類の先祖であり、白人、黒人を問わず、この世界中に住んでいるすべての人たち同様、私たち、タワンティンスーヨの住民もアダムとイヴの子孫であります。人類を贖い、その魂を救うために、我らが主イエス・キリスト、すなわち、活ける神の御子が聖霊の御業によって聖処女マリーアに受胎し、天上界から降り立たれました。すなわち、我らが主イエス・キリストはただひたすら悪魔の支配する地獄の呪縛から人類を解き放つために、降臨されたのです。

我らが主キリストは神として、また、正真正銘の人間として、33年を人々の間で送られましたが、人間であるがゆえに、人類を贖うためにエルサレムで十字架に磔にされて死を迎えました。キリストは息絶え、埋葬され、地界へと向かい、そうして、聖なる父たちの魂を救い出しました。そして、その3日後、イエス・キリストは死者の中から復活し、肉体と魂を備えて40日間生きつづけ、その後、天国へ昇り、全知全能の神の偉大な権威のみもとに座られました。そこから、主は使徒や弟子たちに聖霊の恵みを送られ、彼らがそれまで以上に勇敢に、また、神に関する霊的な事柄を正確に理解して説き広めるようになさいました。〔我らの〕神はあらゆる神々の上に君臨する真実の神であり、我らが創造主、偉大な神であります。神は天上界におわし、至高の支配者、裁き手、慈悲深い支配者として天上界、すべての世界を永遠にその命令によって治められているのです。

私たちは子供の頃によく、大昔の話や異教を奉じていたころの出来事、野蛮な習慣やおとぎ話を聞かされたものです。そのことについて、以下に記すことにします。(と言いますのも、この土地の人々の間では、過去の出来事がよく話題になり、語られているからです。)

インディオたちの話では、プルンパチャ〔「未開の時代」の意〕のころ、タワンティンスーユのあらゆる人々がボトシーの彼方から戦闘態勢を整えて3つないし4つの軍団に別れてやって来たらしい。彼らはやって来ると、さまざまな土地を開拓し、占領していった。つまり、それぞれの集団が荒蕪地に住みついたのである。この時代はカラックパチャ〔「世界の始まりの夜」の意〕、もしくは、トゥタヤチャチャ〔「暗闇の時代」の意〕と呼ばれている。人々の群はそれぞれ、自分たちの住処、故郷となる荒蕪地を選んだので、この時代はプルンパチャ・ラッカプティン〔「まだ未開の時代」の意〕とも呼ば

れている。

この時代はひじょうに長い歳月に及んだ。結局、大勢の人々が定住しだすと、土地や場所が大幅に不足する事態が起きた。そうして土地が不足しだすと、日々、戦いや争いが起こり、人々はみな、こぞって砦を築くようになった。その結果、衝突や戦いが日常茶飯事となり、この時代、平和な時などなく、人々は互いを取るに足りないことで争ったり、干戈を交えたので、安心して暮らせず、平穏な日々などなかった。

そのころ、真夜中にハピニュニョが「やられた。俺たちは負けてしまった。畜生、縄張りがなくなった」と、恐ろしい声で嘆きながら姿を消す音が聞こえたらしい。このことは、悪魔たちがカルバリオの丘で磔刑に処せられた我らが主イエス・キリストに打ち負かされたことを指していると理解されている。と言うのも、インディオたちの話によると、かつてブルンパチャの時代には、ハピニュニョたちがこの地方のいたるところを人目につく格好でうろつき回り、そのため、夜が更けて外出するのは危険だったからである。つまり、極悪非道な圧制者であり、人類の仇敵であるハピニュニョは、男であれ女であれ、また、子供や乳飲み子であれ、相手かまわずに連れ去り、ひっさらったのである。

ハピニュニョとアチョカリヤ、つまり悪魔がこの土地を追放されて数年が経過すると、このタワンティンスーヨの地方、すなわち、王国に、髭をたくわえ、髪の毛を長くした中背の一人の男がいくぶん長めの服をまとって現れた。インディオたちが言うには、その男はすでに壮年期を過ぎており、白髪まじりで痩せこけ、杖をついて歩いていたらしい。彼は住民たちに愛情たっぷりに教えを説き、彼らのことを例外なく、「息子」とか「娘」と呼んだ。〔しかし〕住民たちは彼の話に耳を傾けなかったし、彼のことを気にも留めなかった。彼はすべての地方をくまなく訪れては、目に見える奇跡を数多く行った。つまり、病人にただ手を触れただけで、病気を治したのである。彼は私利私欲をもたず、身の回り品とて、なにひとつなかった。彼はこの地方で話されていたさまざまな言葉をことごとくその住民より上手に話したという。人々はその男をトナパもしくはタラパカ・ウィラコチャン・パチャ・ヤチ・カチャンかパッチャカン〔「世界の創造主ビラコチャの使者か執事であるトナパもしくはタラパカ」の意〕、ウィックチャイ・カマヨック〔「教えを説く人」の意〕と呼んでいた。

当時、インディオたちは彼のことをからかって、よく「お喋りな男」と

言っていたらしい。彼は教えを説いて歩いたが、いつも聞いてもらえなかった。なぜなら、当時、インディオたちはその男のことを無視し、気に留めなかったからである。そういうわけで、彼はトナパ・ウイラコチャンパ・カチャン〔「ビラコチャの使者トナパ」の意〕と呼ばれていた。その男こそ、栄光に輝く使徒聖トマスだったのだろう。

インディオたちの話では、その男はアポ・タンポという名のカシーケの村〔現在のパカリクタンポ〕に到着したらしい。つまり、村はアポ・タンポというカシーケに治められていた。インディオたちの話によると、ちょうどそのとき、つまり、その男が疲れ果てて村にたどり着いたとき、村人は結婚の宴の真っ最中であつた。アポ・タンポは彼の話に好意をもって耳を傾けたが、配下のインディオたちは不承不承、話を聞いた。当日、その旅人は客人としてもてなされたので、持っていた木の杖から枝を一本折って、アポ・タンポに差し出し、優しい言葉使いで彼を諫しめた。アポ・タンポは彼の手からその枝を受け取り、注意深く男の話を聞いた。そうして、人々は彼の説く教えに耳を傾けたが、そのとき彼はその枝で数々の掟をひとつづつ示し、記した。私の父ドン・ディエゴ・フェリペと同じ時代、つまり、ごく最近の老人たちがよく口にする話によると、その教えはほぼ神の掟、とくに七つの戒めであつたらしく、それを破った人たちにはかなり厳しい罰が加えられた。つまり、〔神の十の戒めのうち〕そのとき、ただ我らが主である神とその御子イエス・キリストの名前に関するのみが知らされなかったのである。しかし、今では老人たちの間で、それは衆知のことになっている。

インディオの話によれば、トナパと呼ばれたその男はコリャスーヨ地方をくまなく訪ね歩き、休むことなく教えを説きつづけた。そしてついにある日、彼はヤムケスパ村という大きな村にたどり着いた。しかし、そこでも、彼はひどく辱められ、罵られ、村から追い出された。インディオたちが言うには、彼はやや長めの服とマント以外に着替えももたず、それ以外に持ち物といえ、書物だけであつた。

インディオが言うには、トナパがその村を呪ったので、村は水没してしまつたらしい。今では、その場所はヤムケスパコチャー湖と呼ばれている。現在、インディオたちで、かつて大きな村であつたその場所がなぜ今では湖となっているのか、その経緯を知らない者はほとんどいない。

ひとつの奇跡。インディオたちの話によると、カチャ・プカラと呼ばれ

るととても高い丘の上に、かつて女性の姿をした偶像が立ててあった。インディオが言うには、トナパはその偶像を唾棄し、やがて偶像に火を放ち、丘もろとも焼きはらった。偶像は碎け、丘はまるで蠟燭のように溶けてしまったらしい。今でも、その前代未聞の恐ろしい奇跡の痕跡を見ることができる。

ケナマリスでも、別の奇跡が起きた。インディオたちの話では、彼はとある村で優しい言葉を使って教えを説きはじめたらしい。ちょうどそのころ、村では結婚の宴が張られ、たけなわであった。[したがって]村のインディオたちはトナパの教えに耳を貸さなかった。それで、トナパは彼らを呪い、石に変えてしまったという。その石を、今も見ることができるらしい。同じような奇跡がプカラをはじめ、さまざまな土地でも起きた。

インディオの話では、その男は教えを説きながら歩きつづけ、カラバヤの密林地帯へやって来た。そこで、彼は実に大きな十字架を作り、それを肩に担いで運び、カラブコの山に据えた。そして、男はそこから大声を張り上げ、涙を流しながら、教えを説いた。そこで、彼はその地方のカシーケの娘の頭に水をふりかけたらしい。その様子を目にしたインディオたちは、トナパが彼女の頭を洗ったと思いこみ、彼を捕らえ、カラブコの大きな湖の畔で〔牢に入れ〕厳重に見張り、髪の毛を刈った。(カラブコという名前は、明け方にさえずりはじめるプクプコという鳥に由来する)。インディオたちがさらにつづけて言うところでは、夜明けに、一人の美しい若者が捕らわれの身となったトナパのもとへやってきて、次のように告げた。

「心配なさらないでください。私は、ひたすらあなたの身を気遣っておられる気高い女性に命じられて呼びに来たのです。そのお方は平安の地へ赴かれようとしています。」

若者はそう言って、トナパの腕や手足を縛っていた縄に指を触れたという。トナパにはすでに残酷な死刑が宣告されていたから、大勢の警護の者がいたらしい。しかし、実際のところ、夜明けに、正確には明け方の5時ころ、トナパは(その若者と一緒に)湖に入り、持っていたマントを湖水に広げた。すると、マントは筏の代わりになったという。

トナパがその地方のカラブコの村に到着すると、クラーカ〔首長〕や有力者たちは彼らの偶像が倒され、破壊されたのを知って取り乱した。インディオたちの話によれば、偶像はまるで風のように舞い上がったらしい。そ

して、偶像、つまり、ワカはこれまで人が訪れたことのないプナ〔寒冷な高地〕へ逃げ込み、涙を流し、その身を追われたことを嘆き悲しみ、うめき声を上げていたという。あるインディオがそのような姿の偶像を目撃し、嘆き声を耳にしたらしい。クラーカたちはその知らせを聞いて、さきに述べたように捕らえていたトナパが村にやって来たことを大いに悔やんだ。

インディオたちがつづけて言うところでは、そうしてトナパは野蛮な人たちの手から解放されると、ティティカカと呼ばれる島にしばらくとどまった。それから、彼はティキナを通してチャカマルカの方へ向かったという。そこで、彼はティワナコという名前の村に出くわした。そのとき、村人たちは酒と踊りに夢中になっていた。村を去るとき、トナパはいつものように、教えを説いたが、彼らは耳を貸そうとしなかった。そこで、トナパは激怒し、天上を見上げ、その土地の言葉で彼らを呪った。すると、トナパがその土地を去るや、踊りに興じていた人々は一人残らず、石になってしまった。つまり、石に姿を変えてしまったのである。その石は今でも見ることができる。これはその場所を通ったことのある人たちの話である。

トナパはさらに旅をつづけ、チャカマルカ川に至り、そこから海へ出たという。私の理解するところでは、彼は海峡をわたって別の海へ出たのだろう。以上はインカ〔貴族〕たちの話から判明したことである。

インディオの話では、トナパがアポ・タンポに手渡した例の枝はマンコ・カパック・インカと呼ばれる、アポ・タンポの子供が誕生したとき、純金に変わったらしい。マンコ・カパックには合計七人の弟や妹がいて、それぞれ、アヤル・カチ、アヤル・ウチュ、アヤル・アウカなどと呼ばれていた。

アポ・マンコ・カパックは、アポ・タンポとパチャママ・アチェという名前の実の両親が亡くなると、つまり、両親を失い、孤児になったのを知ると、すでにそのとき、立派な男になっていたので、新しく征服遠征を企てようと考え、軍勢を確かめるため、人々を集めて調べた。

アポ・マンコ・カパックは困難や障害がいくつか待ち受けているのを知り、自分の軍勢を確認すると、弟たちと話し合っ（住むべき）土地を探すことにした。彼は豪華な衣服を身にまとい、武器を手にし、トナパが残っていた例の枝（その枝はトパ・ヤウリと呼ばれた）と、トナパが飲むと

きに愛用していた二つの黄金製の小さなアキリヤ（トパ・クシと呼ばれた）を携えた。それから、彼は弟たちに声をかけ、太陽が昇る山の方もしくは南へ向かって出発した。

インディオの話によると、そうしてアポ・マンコ・カパックがあたり一帯を見下ろす一番高い丘に辿り着くと、彼のすぐ側に、色とりどりの実に美しい虹がかかった。そして、その虹の上に別の虹が現れたので、アポ・マンコ・カパックは虹と虹の間に挟まれる格好になった。すると、彼は「いいことがあるぞ。いいことがあるぞ」と叫んだ。それから、彼はさらに言葉をつづけて次のように語ったという。「まもなく、望み通り、私たちは素晴らしい繁栄と勝利を手にすることになるぞ」と。そう言って、アポ・マンコ・カパックは欣喜雀躍し、大そうな喜びようでチャマイ・ワリクサの歌を口ずさみだした。

その後、アポ・マンコ・カパックはサニユク村から弟たちと一緒にコルカパンパに向けて下った。すると、遠くに人影のようなものが目に入った。弟の一人がそれをインディオだと思い込み、駈け寄っていった。インディオたちの話では、その場に到着して彼が目にしたのはインディオのようなものが座っている姿であった。それはとても獰猛で残忍なインディオのような姿をし、両目は真っ赤であった。アポ・マンコ・カパックの弟の一人、つまり、末の弟がその人影らしきもののところへ着いたのだが、そのとき、人影らしきものは側に来るよう、彼に言った。弟が言うとおりにすると、彼の頭をなでながら、その人影らしきものはこう告げた。「よくぞこの私を探しにきてくれた。そして、やっと見つけてくれた。じつは私もおまえを探していたのだ。もう、私の手から逃れられない」と。

マンコ・カパックは、弟の帰りがあまりにも遅いので、別に妹を呼びにやらせた。ところが、その妹も同じようにサニユクの例のワカに魅入られてしまった。マンコ・カパックは、二人ともなかなか戻ってこないで、とうとう業を煮やし、自らその場へ足を運んだ。そして、到着すると、今にも死にそうな二人の姿を目にした。彼は二人に帰りが遅くなった理由を尋ねた。すると、二人とも身振り手振りを交えて、二人のちょうど中間にある石のことを訴えたいらしい。話を聞いて、マンコ・カパックは二人のすぐそばへ近寄り、いったいなにを訴えているのか確かめた。どうやら二人はその偶像、つまり、ワカに害を加えられたようであった。そこで、アポ・マンコ・カパックは激怒し、その石、つまり、ワカを足蹴にし、もっ

ていたトパ・ヤウリという棒で石の頭を殴りつけた。すると、石の中から、まるで人間が俯き加減に話すような声が聞こえた。つまり、偶像はマンコ・カパックにこう言ったのである。

- ★「おまえが例のおしゃべりな老人から授かった棒を持ってこなかったら、おまえを許さずに、好きなよう弄んでやったのだが。さあ、とっとこの場を立ち去れ。おまえは素晴らしい幸運を授ったよ。私はここにいるおまえの弟と妹に好きなように楽しませてもらうことにする。この二人は肉欲に溺れて罪を犯したのだから。つまり、この二人は私の居場所（地獄のことだろう）、つまり、ピトゥシライとか、サワシライと呼ばれる場所に身を置くのがふさわしいのだ。」

マンコ・カパックは弟たちが危機に瀕しているのを知り、当然のことだが、悲痛な思いに駆られ、涙を流した。それから、彼はその場を立ち去り、最初に虹（クイチ、トゥルマンヤもしくはヤヤカルウィと呼ばれる）を見た場所へ向かった。到着すると、彼はともに旅した弟たちがいなくなったのを寂しく思い、呟いた。「私はなんて不幸な身の上なんだ。父も母もないのに」と。そのように、マンコ・カパックは苦しみ悶え、なんとか悲しみや苦しみを振り払おうと懸命に努力した。「ワイナカプティ」もしくは「ワイナカプリー・リヤイプニ・チカチキ・クナチャイ・アモワン」[[「若かりしころ、わたしは大いなる不幸に見舞われた」の意]。それ以来、その場所はインカプ・ワイナ・カプリン [[「インカが若かりしころ」の意] と呼ばれた。以後、その場所に、ほかのインカたちも禿鷲のような形に刻んだ見事な石像を祀った。それは吉兆を意味し、インカプ・ワイナ・カプレンと呼ばれた。その後、インディオたちもその石像を崇拝しだし、石が彼らと口を利くようになった（この件については、しかるべき箇所で後述することにしてしよう）。

マンコ・カパックは手にトパ・ヤウリを携え、イパ・ママ・ワコという名の妹、それにいま一人の妹ならびに弟を連れてワイナカプリーからコルカパンパの方へ出発した。コルカパンパに着くと、一行は数日、そこに留まり、それから今度はワマンティアンカに向けて出発した。彼らはワマンティアンカで数日過ごしたあと、コリカンチャ [[「黄金の広場」の意] という場所へ向かった。そして、一行はコリカンチャで、住むのに適した場所を見つけた。つまり、そこには、ウリン・カチャンとアナン・カチャンという素晴らしい水源、すなわち、泉があったのである（そのため、その場所は

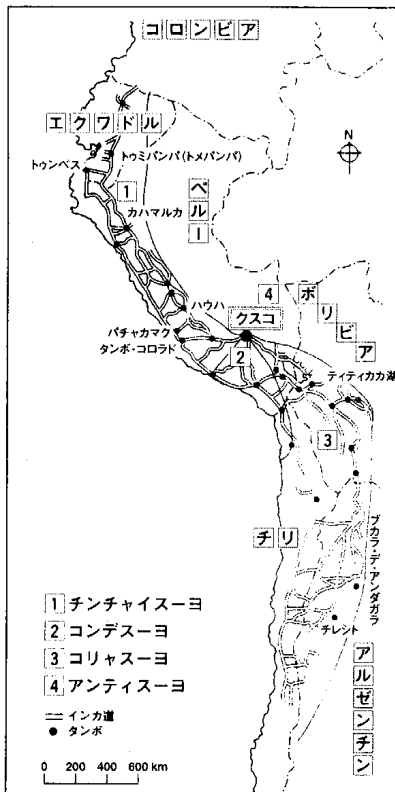
アナン・クスコ、ウリン・クスコと呼ばれた)。その後、一行は、その土地の住民であるアルカウイサ人、クリムチマ人とカヤオカチ人がクスコ・カカもしくはクスコ・ルミと呼んでいた岩山を見つけた。そのため、その場所はクスコパンパとかクスコラクタと呼ばれるようになり、その後インカたちもクスコ・カパックとかクスコ・インカを名乗った。

〔さて〕このインカ・マンコ・カパックは実の妹であるママ・オクリヨという女性を妻に迎えたが、それは一つには、同じ身分のものがいなかったからである。また一族の純血を守るためでもあった。そのような結婚はインカ以外の人たちには決して認められておらず、むしろ、禁止されていた。マンコ・カパックは配下の人々を正しく治めるため、道德の掟を数々と制定しはじめ、従わない人々を征服していった。

タワンティンスーユに住む数多くの人々や集団が本心からすすんで立派な贈り物を携えてやって来た。新しいインカの知らせは偉大なる名声とともに広まり、彼らはインカに臣従することになった。〔その知らせを聞いて〕、

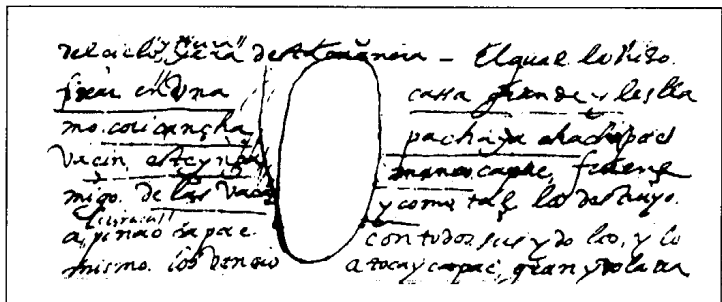
たいそう喜んだ人々もいれば、思い悩んだ人々もいた。と言うのも、インカがいかなる勇敢な者よりも権威を誇り、武力に優れ、そして、勇敢な人々や部将たちから、また、総じて貧しい民や庶民からもこよなく慕われているのを耳にしたからである。そうして、インカの行うことは万事、いやが上にも栄え、権勢はいや増した。

このインカは銀細工師に命じて純金で一枚の平たい板を作らせたが、その金板は天地の創造主が存在することを意味していた〔図1参照〕。

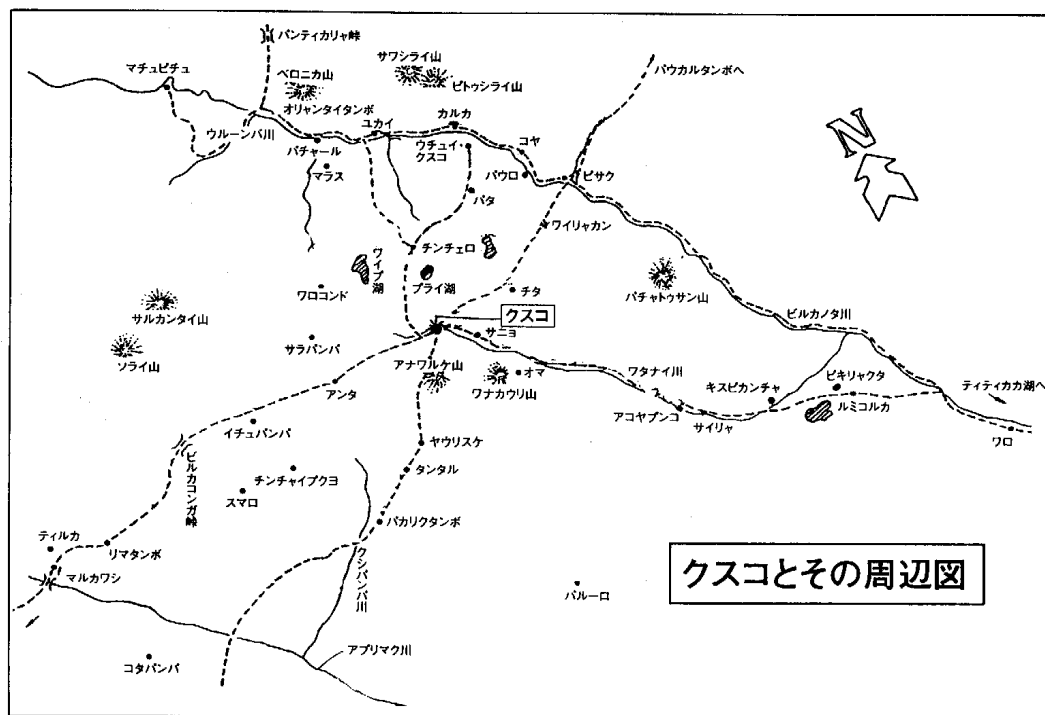


〔地図1〕

タワンティンスーユとインカ道
(Pease G.Y., Franklin, Perú.
Hombre e Historia. Entre el siglo
XII y el XVIII. II. Lima. 1992.
などより作成)



〔図1〕



発祥の地もしくは出身地を選ぶよう、すなわち、定めるよう命じた。

インディオたちはおしなべてかなり無知で愚鈍であったから、あまり考えもせず、また、怠惰でもあったので、パカリスカ（もしくはパカリムスカ）〔「発祥の地」の意〕に、湖を選ぶ人たちもいれば、泉、樹木の生えていない岩山、山、峡谷を選ぶインディオたちもいた。そうして、それぞれの集団がパカリスカを選んだ。

そうして、悪魔や悪霊、つまり、ハピニューニョは無知で文字をもたないこの人たちをたやすく欺き、偽りのパカリスカの中へ入り込み、偽りの約束事を口にした。そういうわけで、日を追って、これらパカリスカは増えていった。

（パカリニム〔「私 私たちが生まれた」の意〕の源はパカリタンボであった。それは、あらゆる集団の人々や住民がパカリスカンチク、ルクシカンチク、あるいは、マチュンチクパ・パカリスカン〔「私たちの生地、私たちの出身地、あるいは先祖の生地」の意〕を言えるように願ってのことだった。つまり、インカ・マンコ・カパックがパカリニムを考え出させた主な原因は、彼がインディオたちを識別できず、また、出身の集団が明らかでなかったことが頻繁に起きたからであり、ただ衣服でしかインディオたちを識別するしかなかったからである。そういうわけで、インディオたちはすでに記したような場所を〔発祥の地だと〕でっち上げたのである。）

この同じインカはインディオたちに、赤ん坊の頭を〔板で〕縛りつけるように命じたが、それはその子が素直で従順な人間に育つように願ってのことであった。なぜなら、丸くて大きな頭をしたインディオはきまって何事にも恐れを知らなくなり、えてして反抗的だからである。

マンコ・カパックには、嫡出子にシンチ・ロカがいた。シンチ・ロカは父親の地位をことごとく受け継いだ。嫡子、私生児を問わず、シンチ・ロカには弟たちがいた。彼らはシンチ・ロカより若かったので、チマ・パナカ・アイロと呼ばれた。（つづく）